

海外メンタルヘルスの現場から II

(31) 駐在員の過労問題

シンガポール日本人会クリニック

医師 日暮 真由美

電通元社員の方の自殺が過労死認定を受けたこともあり、日本国内では過労死防止対策を希求する真剣度が益々高まっていると感じる。もとより、産業医の先生や企業で社員の健康をあずかる部門の皆様は常日頃から、「命より大事な仕事はない、社員の健康を守ること」が一番の関心事であることと思う。

今回の電通の事件が報道されてからのこの短期間の間にも、過労状態の駐在員の方がすでに数名、当院を初診されている。夜中の2時か3時頃まで働き、3～4時間寝て、また朝8時から9時頃より働く。休日は週1日とればいいほうで、大抵の休日は昼頃に会社に出かけてやはり6時間くらいは働く、あるいは朝早くから空港まで出かけてお客さんや日本本社からの出張者を迎え、一日中アテンド。どの患者さんの職場も業務量が多く、人員が足りないのが明らかだが、コスト削減のため人員補充の予定はまずないと言う。そんなところに、ちょっとパワハラっぽい上司でもいればさらに上等な味付けになる。

これら初診の方は皆、ある朝、突然、体が動かなくなって会社に行けなかったという人たちだ。急に自分に起きたそんな出来事にほぼ全員が半ば驚いて受診している。働き方が異常だったのは気がついてしたが、回りも皆同じように働いているけど誰も倒れていないとか、日本でも同じくらい働いていたけれど問題なかったなどと、誤った比較をしており、自分の無理には気がつきづらかったようである。そして、海外駐在者は日本本社の残業禁止令には縛られないからいくらでも残業するのが当たり前だというのが、全員の共通の認識であった。

過労死では決して長時間労働だけが問題なのではないが、しかし、もし長時間労働があったとすれば、そのものによる肉体的精神的疲労は必ず無視できない大きさで存在するはずである。歩き過ぎれば足が痛くなる、食べ過ぎれば胃がもたれるように、頭脳労働も過ぎれば脳は疲れる、働かなくなる。脳も胃と同様に単なる臓器であり、物質である。使いすぎればダメージがくる。傷みのきている物質に対して、頑張れば何とかなるといふ精神論は意味がない。

今月11月は過労死予防月間とされており、厚生労働省が主催して全国各所で過労死等防止対策推進シンポジウムが開かれている。東京のシンポジウムでは、2008～2013年の6年間に上海に勤務していた日本人247人が亡くなり、うち

35%が突然死、8%が自殺との報告があり、海外駐在員の過労死予防対策への提案がされたとのことだ。海外勤務のため蚊帳の外に置かれているような状態は一刻も早い是正を望みたい。

亡くなられた元電通社員の御母様が同シンポジウムで講演された内容が発表されている。悲痛な思いがひしひしと伝わり、私は涙なしには読むことができなかった。